

令和5年度（2023年度） 第1回東海市不登校対策協議会 会議録

- 1 日 時 令和5年（2023年）6月14日（水）
午後3時から4時
- 2 場 所 市役所302会議室
- 3 出席者 東海市医師会理事 朝倉 直子
社会福祉協議会 地域福祉課長 宝達 真志
主任児童委員 菊本 裕也
知多児童・障害者相談センター児童福祉司 柘植 優奈
スクールカウンセラー 鎌田 陽世
東海市立富木島小学校長 杉江 桂
東海市立三ツ池小学校主任養護教諭 家田 好美
東海市立上野中学校生徒指導主事 木原 啓裕
健康推進課 主任指導保健師 大串 文子
- 4 傍聴者 なし
- 5 事務局参加者
東海市教育委員会 教育長 加藤 千博
教育部長 小島 久和
学校教育課長 桜井 正志
学校教育課 主任指導主事 明壁 啓純
" 指導主事 大石 慎也
" 指導主事 高橋 民子
" 統括主任 永田 紀子
" 教育相談員 坂口 栄子
適応指導教室 ほっと東海
教育相談員 武田 基二
教育相談員 深谷 公子
スクールソーシャルワーカー 飯田 彩花
スクールソーシャルワーカー 西 実莉
スクールソーシャルワーカー 甲斐茉莉奈美
- 6 会 議
 - (1) 教育長あいさつ
 - (2) 委員・事務局自己紹介
 - (3) 会長・副会長選出、あいさつ
 - (4) 協 議

(4) 会長・副会長選出、あいさつ

(5) 協議

ア 令和4年度不登校の状況について（非公開）

イ 令和4年度（2022年度）不登校対策の方針と取組について

（指導主事より資料に基づいて報告）

学校が児童生徒にとって「心の居場所」となるように、学校生活における様々な場面で一人一人の自立への援助をするとともに、児童生徒の状況を早期に把握し、学校として組織的に対応していく。

① 組織的な不登校問題対策の推進

○居場所としての学校・学級づくり、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、心の相談員の配置、楽しい・分かる・できる授業の構築、幼保小中との密なる連携を図る。

② 不登校児童生徒対応と不登校予防対策の推進

○グループ支援活動の推進・充実、各校における指導部会の実施と資料の累積を生かした支援、不登校対策協議会での提言を不登校対策担当者会に反映させ、不登校対策のあり方について点検・評価できる体制づくりを行っていく。

③ 適応指導教室の充実

○「ほっと東海」での不登校児童生徒の学習指導や自立支援活動を充実させ、学校との連携を密にするとともに、カウンセラーやスクールソーシャルワーカーも交えたケース検討等情報交換会を充実させる。

④ その他

○子どもの自立と未来を語る会（旧：進路ガイダンス）、適応指導教室交流会、青空教室等を不登校対策事業の一環としてとらえ、不登校児童生徒を幅広くサポートしていく。

ウ 主な意見

○不登校は、家庭環境や環境要因も大きく関係している。不適切な養育やネグレクトなどから、子どもにとって家庭が安心できる場所ではなくなり、学校に行く意欲がなくなってしまう子どもいる。福祉においても、子どもだけでなく、保護者の心に入り込んで、早期に相談を受けられる体制づくりが必要になってきている。

○不登校によって、対人関係を構築する機会や学習する機会を失うことになってしまう。しかし、学校に行けない時代があったからこそ、その時に学んだ

り経験したりできることもある。家庭では、不登校のお子さんを通して、家庭の在り方を見直したり、新たな生き方を求めたりなど、新たな一步を踏み出した方もいる。一概に不登校がマイナスなことだけではない。

○不登校のままで済まされてよいわけではなく、社会的な接触を失っていくことは、子どもにとってデメリットが多い。学校教育だけでなく、他の人と繋がっていく機会や学ぶ機会を保障していくことが大切である。

○学校に行かなくても、インターネットなどのゲームの世界で一番になったり、インターネットの世界で努力して秀でたりするなどのことをよく聞くようになっていく。個々の生き方や個々の自由は、何が一番いいのか、どれが正しいのか、非常に難しい時代になってきていると感じる。

学校に行ってもよし、行かなくてもよしになってしまったら、義務教育は一体、何だろうとなってしまう。

○学校に行っている間は、学校が不登校児童生徒を把握できる。民生委員として民間を見回り、卒業した後に家から出てこられなくなってしまう子どもの把握に努めている。できれば、小学校や中学校の間に、学校に行けるように何らかの形で努力して、みんなが学校に行けるとよい。

○家庭の中で、親が子どもの気持ちを必要以上に尊重してしまうなど、親と子どもの主従関係が反転していたり、子どもの気持ちを受け止めないまま、親の都合を押し付けてしまったりなど、親子の関係性がいろいろな意味で変容してきている。不登校は、生家・成育歴の中の6年から12年後に、いろいろな問題が絡み合い、子どもの失敗体験や上手くいかなくて自分を否定する体験を重ねながら呈してくる問題だと考える。

○不登校は、子どものひとつの意思表示である。そういった子どもたちに対して、適応指導教室「ほっと東海」、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、力を合わせていろいろな支援を行っていく必要がある。

○学校は、もっと福祉や地域と連携していくことが大切だと考える。子どもや保護者に対して、学校とは違った視点でアプローチ、支援や関わりができる。子どもだけでなく、保護者も違った視点で家庭生活の幅が広がっていく。